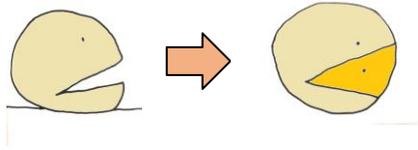


『ぼくを探しに』

令和元2年1月
高等学校
カウンセラーだより裏ら

今回は、シルヴァスタインというアメリカの作家さんが書いた『ぼくを探しに』という絵本のご紹介です。

「ぼく」には欠けた部分がありました。そこでぼくは、まんまるになれるように、自分の欠けた「かけら」を探して旅に出ることにしました。まんまるではないので、すいすい転がって移動することが出来ません。旅の途中、カブトムシに追い越されたり、チョウチョが頭に止まったり、草むらにはまり込んだり、穴に落ちたり、壁にぶつかったりと、大変なことがたくさんある旅でした。



何度か、良さそうなかけらに出会いました。でも、大きすぎたり、小さすぎたり、なかなかぴったりしたかけらに出会うことは出来ません。しかし、ついにぴったりのかけらと出会うことが出来たのです。そしてぼくは、そのかけらと合体して、完全な丸になることが出来ました。

ぼくは、すいすい転がることが出来るようになりました。あんなに大変だった坂道もすいすい移動出来ます。カブトムシに追い越されて悔しい思いをすることもなくなりました。でも、速く動けるようになったせいか、道ばたに咲いているお花を眺める時間もないし、チョウチョが頭に止まってくれることもなくなりました。

しばらくたった頃、ぼくは「なるほど。そういうことだったのか!」とつぶやき、かけらをそっと降ろして、また元の形に戻りました。

どうして「ぼく」は、せっかく丸になれたのに、また欠けた部分がある元の姿に戻ったのでしょうか。完全な丸だったら、苦勞する必要もないし、効率よく、すいすいと順調に動けるのに。もしかしたらぼくは、そんな順調な生活がとてつまらないことに気がついたのかもしれない。欠けた部分があるからこそ、様々な生き物と出会えたり、草花を眺めたりすることが出来るし、大変なこともあるけど、頑張っってそれを乗り越えることが出来る、そんな生活が実はとっても楽しかったことに、ぼくは気づいたのかもしれない。

私たちにも同じことが言えそうです。私たち人間は誰でも欠点を持っています。自分一人で出来ることもたくさんありますが、どうしても出来ないこともあります。欠点を克服したり、出来なかったことが出来るようになるための努力をしたりすることは、とても素晴らしいことだし、是非努力すべきだと思います。

その一方で、欠けた部分を持った人間同士だからこそ、私たちは助け合ったり、励まし合ったり、かばい合ったり出来るのかもしれない。欠けた部分があるせいで、苦勞や試練にも遭いますが、それらを乗り越える度に、私たちは強くなることが出来るのかもしれない。

